関西自然保護機構会報 *21*（*1*）：*85－87, 1999*

近畿地方から絶滅した植物　6[1)]

村　田　　源[2)]

EXTINCT PLANTS FROM KINKI DISTRICT, JAPAN. 6

Gen MURATA

オナモミ *Xanthium strumarinum* L.

1960年頃までは道端や川原などの荒地に普通に見られた一年生の大型雑草であった。高さ30～100 cm位になり，茎には黒紫色の小斑紋がある。葉は3浅裂して大小不同の重歯牙状鋸歯があり，葉面はざらつく。

日本で見られるキク科植物では珍しく風媒で，花は夏から秋に開き，雌雄別々の小さい頭花が同じ株の上につく。雄性の頭花は枝の先端部に数個円錐花序状に配列し，ほぼ球形で淡黄緑色。おしべは花糸が合生して筒となり，葯だけが離生して花粉を飛ばす。雌性の花序は総苞が合生してつぼ状体を作り，中に普通2個の雌花がある。つぼ状体の外面にはかぎ状のとげがあり，その中でも先端の2個の刺は嘴状で特に大きい。つぼ状体の中には普通2個の果実ができるが，その中の大きい方だけが発芽能力があるといわれているが，この属のすべてがそうなのかどうかは不明である。

世界に約30種知られているが，その大部分はアメリカ大陸にある。

オナモミは欧亜大陸に野生し，日本でも古くから知られ，本草和名（918）には奈毛美として記録されているという（長田，1976）。

この種は山には無く，常に人家の近くや耕作地の付近にあるので，古い時代に帰化したのではないかとする説（Kitamura，1942；長田，1976）があるが，私は賛成できない。日本の文化は古くその多くが中国より渡来したので，植物もそう信じられている傾向がある。梅やボタン，モウソウチクなどのように，明らかに人間の手によって中国から持ち込まれたものもあるが，もともと日本にも野生していたものや，日本に遺存していて逆に日本から大陸へ移入されたと考えられるものもかなりある。

オナモミの場合，私は日本にも河川敷や平野部の裸地に野生があったと考えた方が合理的であると思う。

それには次のような事実がわかってきたからである。

1. オナモミはまだ東北地方には残っているかも知れないが，少なくとも近畿地方からは絶滅したと考えられ，近年全く姿を見せなくなった。帰化植物として大陸から渡って来た種なら，普通このような現象は見られない。これはフジバカマについても同じである。
2. オナモミは旧世界に広く分布し，アメリカ大陸にも帰化していると考えられているが，個体変異（この中には生育環境による変化も含まれる）や地方的な変異も大きい。

Widder（1923）は種を細かくとって日本のオナモミを *X. japonicum* Widder とし，アジア大陸では *X. sibiricum* Patrin ex Widder var. *sibiricum* と var. *subinerme*（Winkl.）Widder, *X. inaequilaterum* DC., *X. mongolicum* Kitag.を

1）関西自然保護機構業績　第230号

2）〒615-8282　京都市西京区松尾大利町20－55

それぞれ変種や種の階級で認めた。中国高等植物図鑑第四冊488図（1975）や，中国植物誌第75巻325頁（1979）では，Widder（1923）の見解に従って取り扱っているが，*X. sibiricum* と *X. inaequilaterum* をそれぞれ独立種とあつかっていて，*X. sibiricum* として画いている55図版1～16と日本で見られるオナモミとは少し異なったイメージを受ける。したがって日本にあるオナモミは決して中国に野生するものが帰化したとは考えられない。

3. この種は人家の近くや耕作地付近にあって山に無いということも，日本では決して渡来植物であるということを意味しない。日本は大山脈の山頂部だけが海上に姿を出したような山岳島で雨が多いから，日本の平野は山から雨が土砂を流してきて，堆積した沖積平野である。山岳地と沖積平野では土壌構造が異なるため，日本では山の植物の多くは沖積地には生えても生育できず，平地（沖積地）の植物は山には生育しないのが普通である。

日本では種を大きくとって，変異の巾の広い中で最も古い *X. strumarium* L. を種名として認め，多くの変異形をその中に包含するという見解が一般的である。（Kitamura, 1942；北村他，1957；北村，1981）。しかしアジアから日本にかけて野生するオナモミは *X. strumarium* L. の var. *japonica*（Widder）Hara としてまとめ，*X. japonicum* Widder, *X. sibiricum* Patrin ex Widder, *X. inaequilaterum* DC. をその異名として変異の中に含めるという考え方もある（原，1952）。そのいずれが当を得た取り扱いであるかは，このグループ全体の個体の変異傾向を見た上でないと判断できない。したがってどこにでもごく普通に広く分布している植物ほど地域的な変異が多く名前を決めるのも実際はむずかしいのである。

わかりやすく言いかえると，日本人は種としてはヒト *Homo sapiens* であるけれども，西洋人，モーコ人やインド人などと同じ変異を示す個体群ではないというのと同じで，日本にかつて生えていたオナモミは，シベリアやヨーロッパに生えている個体群とは全く同じではないのである。

オオオナモミ

最近河川敷や道端の空き地などに，オナモミに似てつぼ状体が大きく長さ1.8～2.5 cm，巾1～1.8cm，表面やや光沢があって刺も長く大きいものが拡がってきた。

これはオオオナモミと名付けられ，最初1929年に岡山県で見つけられ，*Xanthium canadense* Mill と同定されたが，メキシコ原産の *X. occidentale* Bertol.とするのが正しいようだ（北村，1981）。

オオオナモミがだんだん拡がって，オナモミが消えて行くのは事実であるが，オオオナモミが繁殖することによって，オナモミの生育地を奪い，これを駆逐して行くのでは無いと考えられる。

河川改修，道路整備その他人間の活動によってオナモミの生育環境が改変されることによって，オナモミが生育できなくなるのが先で，そのあとへ改変された立地環境により抵抗力の強いオオオナモミが繁殖するようになるのだと思われる。一般の帰化植物と在来種との関係も，多くはこれと似た関係にあると考える。

安定した在来種の植物社会の中へ，外来種が侵入してこれを駆逐するという現象はまだ陸上植物では私は知らない。

池などの水中では，外来の水草が在来の水草との競争に勝って，後者を駆逐して行くことがあるようである。水の中というのは世界中同じ環境にあるからだろうか。

長田（1976）にはオナモミとオオオナモミの良い図が出ているので参照されたい。

引用文献

長田武正. 1976. 原色日本帰化植物図鑑 64PL＋425pp. 保育社, 大阪.

————. 1984. 検索入門野草図鑑 4. 206pp. 保育社, 大阪.

Kitamura, S. 1942. Compositae Japonicae Ⅲ. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ. Ser. B, XVI (3): 155－292.＋8PL.

北村四郎. 1981. キク科, 日本の野生植物Ⅲ（佐竹他編）, 156-235, PL129-224. 平凡社, 東京.

————, 村田　源, 堀　勝. 1957. 原色日本植物図鑑草本編Ⅰ合弁花類 70PL＋297pp. 保育社, 大阪.

原　寛. 1952. 日本種子植物集覧Ⅱ. 280pp. 岩波書店, 東京.

Widder, J. F. 1923. Die Arten der Gattung *Xanthium,* Rep. Sp. Nov. Reg. Veg. Beih. XX. 221pp.＋4 PL.